

## 2021年5月NHK四国地方放送番組審議会

5月のNHK四国地方放送番組審議会は、17日(月)、NHK松山拠点放送局(ウェブ開催)において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「2020年度四国地方放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、事前に視聴してもらった事前に視聴してもらった「四国あるある選手権」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、6月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	半井 真司	(四国旅客鉄道 代表取締役会長)
副委員長	柴田 智恵	(有限会社大豊陸送 代表取締役社長)
委員	小松 圭子	(有限会社はたやま夢楽 代表取締役社長)
	田井 ノエル	(小説家)
	床桜 英二	(徳島文理大学 総合政策学部 教授)
	土佐 礼子	(三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー)
	滑川 里香	(一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事)
	西本 佳代	(香川大学 大学教育基盤センター准教授)
	村上 健太郎	(特定非営利活動法人NPO砂浜美術館理事長)

### (主な発言)

<「四国あるある選手権」(総合 4月23日(金)放送)について>

- 全体を通して、違和感やもの足りなさを感じた。「お互いの文化や県民性をもっと知って理解を深めるだけでなく、コロナで元気のない四国をあるあるで元気にしたい」という番組の趣旨に反して、四国各県の文化や県民性の「奥深さ」はあまり感じられなかった。徳島県のパートは、「あるある」というより県のPR動画になってしまっているように感じた。結果発表の場面は冗長であり、審査結果の講評も表面的なものだった。新型コロナウイルスの感染が拡大し、人々が不安や閉塞感(へいそくかん)をいんでいる中で、視聴者が前向きになったり、リラックスできたりする番組を制作

することに意義はあると思う。しかしそれだけでは不十分であり、納得感や充実感が不可欠だ。演出や構成を検討してほしい。また、今回の番組は、テレビ離れが進む10代や20代の若年層に視聴してもらうことを目指して制作したものなのか教えてほしい。

- 高知放送局の吉岡真央アナウンサーのチアダンスや高松放送局の中里颯太郎職員の歌、ラッパーのSKRYUさんのラップ調「あるある」など目を引く演出があった。骨付鳥の注文で、「“親鳥はツウ”という風潮ありがち」という香川県の「あるある」や、徳島県民が他県民から阿波踊りを披露するように求められる「アワハラ」のエピソードにはまさにその通りと感じた。しかし、「龍馬あるある」に終始した高知県や「みかんあるある」を展開した愛媛県のパートは、目新しさを感じず、もの足りなかった。数年ごとに異動があり、他県から移ってきたNHKの職員は、各県の視聴者と同じ感覚で番組を制作することができなかったのではないか。各県の「あるある」とは、自県民にとっては身近に感じられるものであり、他県民にとっては意外性や新鮮さを感じられるものだと期待していたが、地元PRにとどまってしまっている印象を受け残念だった。
- 日常的によく起こる事柄やささいな事柄をネタにして笑いをとるレイザーラモンRGさんの芸風には感心した。複数のネタがテンポよく紹介されていた徳島県の「あるある」は完成度が高く、視聴者の疑問に答える説明もありよかった。優勝した香川県のVTRは、父母ヶ浜などの映像もきれいで、応援団のキャット・ブララさんの『『天空の〇〇』という名称を付けがち』という「あるある」が決め手となった点も納得だった。一方で、愛媛県の「みかんあるある」で取り上げていた「みかんごはん」は、多くの県民が日常的に家庭で作るものではないと思う。同様に、高知県の「龍馬あるある」は、他県民の考えであり、龍馬ラーメンも観光客向けのものだと思う。愛媛県の「あるある」も高知県の「あるある」も両県民にとっては、日常生活で実感するものではなく、目新しさも感じなかったと思う。新型コロナウイルスの感染拡大が長期化し、人々が不安を感じる今、「各県の知りそうで知らないことを紹介し、四国の視聴者を楽しませる」という番組の趣旨はよいことだと思うが、人々が休息や癒やしを求める娯楽番組の中で、新型コロナウイルスについてあえて言及する必要は無いと思う。
- 新型コロナウイルスの感染拡大が深刻な現状において、NHKは正確な情報を伝えていく必要があると思うが、感染拡大が長期化するにつれて、視聴者の心理的負担が重なり、かえって新型コロナウイルスに関する情報が避けられるおそれがある。そうした状況において、今回の番組のように視聴者をリラックスさせ、前向きな気持ちにさせる番組は必要だと思う。各県の「あるある」からは、新型コロナウイルスの感染

が広がる中でも、各地域に根ざした県民性が変わらないことや、前向きに日々を送っている人々の姿が伝わってきた。興味深かったのは、吉岡アナウンサーと中里職員の存在だ。2人の若手職員の演出は、洗練されたものではなかったが、懸命な姿勢が伺え、好感が持てた。今回の番組のように、職種を越えた若手職員たちを主体に番組を制作していくことを検討してはどうか。四国の放送局に所属する職員が、四国について考える機会となると同時に、テレビ離れが進む若者世代とのタッチポイントを創出するきっかけになると期待する。

- 「お互いの文化や県民性をもっと知って理解を深めるだけでなく、コロナで元気のない四国をあるあるで元気にしたい」という今回の番組の目的を達成できていたと思う。よかった点として、「あるある」ネタで四国4県を平等に取り上げていたため、4県の県民が楽しむことができたことだ。選手権という形式にしたことで、各県の「あるある」が評価の対象となっていたため、番組の最後まで展開が気になる構成となっていた。さらに、レイザーラモンRGさん、とろサーモンの村田秀亮さん、ファッションモデルの市川紗椰さんの3名の出演者と、松山放送局の首藤奈知子アナウンサーのやりとりもよかった。出演者の話術やそれを引き立てる演出があって、笑うことができた。番組冒頭のアナウンサーの歌の演出の完成度がやや低く気になったが、その後の場面で首藤アナウンサーがうまくフォローしたのもおもしろかった。今後も、四国発信のスタジオ型バラエティー番組が放送されることを望む。

#### (NHK側)

番組で扱う「あるある」ネタは、協議を重ねて決めた。また、可能なかぎり多くの部署から参加してもらうことを考え、吉岡アナウンサーや中里職員が出演した。レイザーラモンRGさんとともに出演するゲストは、四国出身の村田さんと、反対に四国で暮らしたことがない市川さんを選定し、バランスをとった。今回の番組は、ヒップホップを取り入れた演出やSNSを活用した広報活動を通して、若年層の視聴につなげることを目指した一方で、NHKの主要な視聴者層である60歳以上の視聴者も意識した。視聴者に楽しい番組を届けたいという意図があり、視聴者からの反響には手応えを感じている。

- 「あるある」ネタがすでに世間に広く認知されているなか、なぜNHKが四国の「あるある」を扱い、4県を競わせる番組を制作したのか、制作意図が伝わらなかった。「あるある」ネタでおなじみのレイザーラモンRGさんをはじめとした出演者の人選からは、新型コロナウイルスの感染拡大による行動の自粛が長期化する中、視聴者を

楽しませようというねらいを感じた。その姿勢は重要だと思うが、番組の構成や演出からはそのような工夫は感じられなかった。「あるある」のネタは平凡であり、NHKの職員が登場する演出には、新鮮さが感じられず時代錯誤とさえ思った。例えば、視聴者参加型の番組にしたり、NHKの放送技術を駆使した高精細な映像を打ち出したりするなど改善の余地はあったと思う。動画投稿サイトやSNS上で誰もが動画を発信できる今日において、NHKが制作する番組にはより高い質が求められていると思う。今後の番組制作においては、より検討を重ねてほしい。

- 綿密な調査のもと、制作されたおもしろい番組だった。四国の県民どうしの交流は、昔に比べて少なくなってしまうが四国に対する愛着が強い人は多いと思うので、このように県ごとに競う企画や番組は今後も放送してほしい。どの県のパートもおもしろかったと思う。とりわけ「神戸ナンバーの車は実は淡路島から来がち」という徳島県の「あるある」が1番おもしろかった。また、各県の郷土料理や名産品を扱った食べ物「あるある」は印象に残り、香川県の骨付鳥の「あるある」には共感した。演出面でも、吉岡アナウンサーのダンスや歌からは、懸命な姿勢が伝わり好感が持てた。中里職員の歌もうまく、楽しい気分になった。ゲストのコメントも的確だった。結果発表の場面の演出が適当だったかは疑問だが、香川県優勝の講評も納得だった。各県のVTRの冒頭で撮影日をテロップで表示していたことから、新型コロナウイルスの感染状況への配慮が感じられてよかった。
- 四国の人々を「あるある」で楽しませたいという意図が伝わってきた。そして、実際に視聴者が気軽に見られて、楽しい気持ちになれる番組だったと思う。ゲストの人選もよく、首藤アナウンサーも安心感のある進行をしていた。高知県は、吉岡アナウンサーのはつらつとしたチアダンスと歌がよく、高知県民の龍馬への愛が伝わった。台風が近づく際に、高知駅前の龍馬像が撤去されることは、初耳だった。徳島県は、「アワハラ」と村田さんのトークが印象的だった一方で、VTR中の「あるある」はあまり印象に残らなかった。ただ、「流出とまらない危機！危機！帰っておいでよ」というフレーズからは、四国の少子高齢化や人口流出問題の切実さを感じた。香川県は、中里職員の実体験を交えた歌は切ない気持ちになった。父母ヶ浜が観光名所になったことから、SNSの影響を感じた。愛媛県のパートでは、松山放送局の高橋英佑ディレクターとSKRYUさんのラップがかっこよかったが、「みかんあるある」の内容はあまり印象に残らなかった。
- 当初のねらいのとおり、四国4県の県民性の奥深さがよく分かり、四国の視聴者を元気づけることができた番組だと思う。とても楽しく、気楽に見ることができた。高知県の「龍馬あるある」からは、高知県民の龍馬愛を感じた。チアダンスと歌を披露

した吉岡アナウンサーをねぎらいたい。徳島の「あるある」では、徳島県民が「アワハラ」を感じていることが新たな気づきだった。香川県の「瀬戸大橋通行止めになりがち」「うどん屋玉切れで店が閉まりがち」骨付鳥は「“親鳥がツウ”という風潮ありがち」という「あるある」は、大いに共感できおもしろかった。キャットさんのコメントの『『天空の〇〇』付けがち』という「あるある」が優勝の決め手となった点も切なくて少し笑った。愛媛県の「みかんあるある」は1番完成度が高かった。「大街道で待ち合わせがち」「みかんもらいがち」「のどが乾いたらみかん！」などの「あるある」には共感した。応援団として出演していた地元のみかん農家の方々のダンスやみかん畑の美しさは素晴らしかった。

○ レイザーラモンRGさんの「あるある」ネタを、四国4県バージョンで制作するというおもしろい企画だった。4県でVTRに個性があり、違いを楽しむことができた。また、職種を問わず若手職員が企画や出演をしていたことも評価する。今回の番組は、若手職員の成長ややりがいにもつながったと思う。しかし、「あるある」の内容はありきたりだった。高知県の「龍馬あるある」は内容に目新しさはなかったが、吉岡アナウンサーのチアダンスが印象的だった。愛媛県の「みかんあるある」も、内容よりはラップとダンス、ドローンを活用した映像が印象に残った。徳島県の「あるある」は、内容を盛り込みすぎて、観光プロモーションビデオのようだった。ただし、「アワハラ」のくだりには共感した。その中で、香川県の「あるある」は完成度が高かった。特に「うどん屋玉切れで閉まりがち」や「父母ヶ浜“映える”の苦戦しがち」など優勝にふさわしい「あるある」だった。さらにキャットさんの『『天空の〇〇』付けがち』という「あるある」は秀逸だった。番組の制作意図はよかったと思うが、4県の「あるある」から得られた新たな知識は無く、教養番組としての側面があったかは疑問だ。「あるある」のネタは視聴者から募集する形式にしたほうが、おもしろい内容にできたと思う。

○ 非常にテンポがよくリズムカルで、楽しい気分になる番組だった。視聴中は、新型コロナウイルスの感染拡大を忘れることができた。台風が接近した際に「駅の龍馬撤去されがち」という高知県の「あるある」や「はっきり言って、この県電車ない」という徳島県の「あるある」には、驚かされた。また、香川県では、骨付鳥は「親鳥はツウ」という「あるある」も初耳だった。一方で、同じく香川県の「瀬戸大橋通行止めになりがち」という「あるある」は、四国4県すべてに影響があると思い、共感した。また、「若年層流出しがち」という「あるある」からは、問題の深刻さが伝わり考えさせられた。演出では、吉岡アナウンサーのダンスや歌には心躍らされた。愛媛県のSKRYUさんのラップにもひかれた。1点気になったのは、結果発表の場面だ。歌の演出が冗長であり、それまでの進行がスムーズだったので気になった。

(NHK側)

各県の「あるある」ネタについては、自県民だけでなく他県民も納得できるネタを選定することを心がけた。細かすぎたり、特定の場所や人物を卑下したりするネタにしないように配慮した。また番組の構成としては、高知県の「龍馬あるある」と、愛媛県の「みかんあるある」はそれぞれ1つのネタに絞った「あるある」だったので、徳島県と香川県は県内のさまざまな「あるある」を紹介する形式にしてバランスを取った。結果として、どの県が優勝してもおかしくない内容となり、よかったと思う。一方で、ネタの選定にあたり、年齢や居住県など、どのような属性を持つ視聴者でも分かるような内容にしようと思いつきすぎると、無難すぎるものとなってしまった。結果として「ネタが表面的でありきたりだ」という印象や、「演出が内輪受けだ」という印象を与えてしまったと思う。娯楽番組では、ネタの選定が特に難しいことを痛感した。

(NHK側)

「あるある」ネタについては、特定の人物や場所などを傷つけるような内容にしないように、また各県の県民が他県の「あるある」を理解できるように慎重に選定する必要があった。結果として、「他県のことでも分かる」という印象を抱く人もいれば、「ありきたりすぎる」という印象を抱く人もいたと思う。一方で、演出において視聴者の目をひくためにさまざまな工夫をした。特に、ふだん番組に出演する機会が少ない営業部の職員が出演することは挑戦的な試みだった。新型コロナウイルスの感染拡大が続く中ではあるが、この番組を見た人が、四国のすばらしさを再確認でき、明るい気持ちになることができればよかったと思う。また、四国4県それぞれに放送局があるNHKだからこそ、各局が連携して四国の人々のための番組を制作できると思う。今後も4局が連携して、番組制作をしていきたい。

<放送番組一般について>

- 松山市では公道での聖火リレーが中止となり、セレブレーション会場での点火式のみの実施になったが、4月21日(水)の「ひめポン!」では、その様子を詳しく中継

で伝えていてよかった。公道でのリレーの中止は残念だったが、とても感動的な内容だった。

○ 4月26日(月)のファミリーヒストリー「福山雅治～長崎に生きて 亡き父の思い～」を見た。歌手で俳優の福山雅治さんの祖母や母親の写真からは、福山さんの面影が感じられ印象的だった。福山さんの祖母がかつて育てていた伊予かん畑の場面では、愛媛とのつながりも感じられ、楽しく視聴した。

○ 4月28日(水)の「ニュース845高知」で、大型連休中の外出について、高知市内での街頭インタビューの様子を伝えていたが、「連休中は外出をしない」と言わせているかのように感じた。新型コロナウイルスの感染が拡大している今の状況でインタビューをしても、出かけるとは言いづらい雰囲気があると思う。県内のニュースは周囲の知人らの視聴も多く、本音を言いづらいのではないかと感じた。また、もしインタビューで県外に遊びに行くという声があった場合はどうするのか気になった。街頭インタビューだけでなく、アンケートなどのほかの手法を取ってもよいのではないかと感じた。また、続くニュースは観光キャンペーンに関するもので、県内の旅行を推進するような話題だったため違和感を覚えた。感染拡大防止のために連休中の外出自粛を呼びかけたいのか、それとも経済活性化のために高知県内では旅行をしたほうがよいと推進しているのか、意図が分からなかった。

○ 5月3日(月)のあの日、タクシーに乗って「2021年 春 東京」(総合 後7:30～8:00)を見た。「ドキュメント72時間」とよく似た構成で、とてもよい番組だった。新型コロナウイルス関連の報道が続き、へきえきしていた中、この番組はとても心に染み込んだ。中でも、タクシーに乗り込んできた女性が、友達とおしゃべりをするような雰囲気で運転手と会話する様子が、自然体でとてもよかった。これからも制作を続けてほしい。

また、5月8日(土)の「みんなのうた60フェス」(総合 7:30～8:43)を見た。紅白歌合戦のようでとてもいい番組だった。トークも適度な尺で、歌も踊りも十分に楽しむことができた。世代を超えて家族と一緒に歌を口ずさみ、楽しむことができる素晴らしい番組だった。歌の力を改めて感じることもできた。

いずれも心に安らぎを与えてくれる番組で、久しぶりにテレビを見てよかったと思うことができた。

○ 5月7日(金)の四国らしんばん「悪いのは“感染者”じゃない ～ハンセン病 元患者・家族からのメッセージ～」を見た。新型コロナウイルスの感染が拡大する中、感染者や医療従事者、その家族への差別などが社会問題になっていることを真正面か

ら扱った非常によい番組だった。ハンセン病に対する根拠のない隔離政策によって、人生を奪われた元患者や家族のことばかり、偏見や差別の恐ろしさがよく伝わり、このような歴史を繰り返してはならないことが訴えられていた。また、ゲストとしてハンセン病関係の訴訟に携わってきた神谷誠人弁護士と、東北学院大学の黒坂愛衣准教授を招いたことで、番組の説得力が増し、よい人選だったと思う。民放の情報番組では、新型コロナウイルス感染の怖さをあおったり、時短営業要請に応じない店舗を過剰に非難したりする様子を目にするのが、番組側が差別を助長している側面もあると思う。番組制作にあたっては、よく配慮してほしい。今回はこれまでの四国らしんばんの中でも、よくできた内容だと思ったが、タイトルだけを見て積極的に視聴するのは、問題意識が高い人に限られるのではないか。より多くの人に視聴してもらえるよう検討が必要だと思う。

○ 同じく5月7日(金)の四国らしんばんを見た。新型コロナウイルスの影響下で、偏見や差別が再び生じることに警鐘を鳴らす番組だった。香川県の大島に国立療養所があるということは知らなかった。この番組を見て、過ちを繰り返さないようにしようとする視聴者が1人でも多くいてほしい。

○ 5月12日(水)の歴史探偵「真相！池田屋事件」を見た。大河ドラマ「新選組！」の映像を使用していたり、5月9日(日)の「青天を衝(つ)け」に土方歳三が登場したりということもあって、SNSでも話題になっていた。長州藩側の生存者の視点を中心に再現ドラマを作ったのは賛否両論あると思うが、池田屋事件についてこれまでのイメージとは異なる新たな視点から伝えたいという番組のねらいがよく伝わってきた。

また、5月14日(金)のひめDON！「生でどうぶつクイズ！～飼育員からの挑戦状～」は、暗いニュースが続く中、明るい気分になる番組が見たいと思い視聴した。動物園などに行く機会が少なくなる中、動物がどのように過ごしているかを見ることができ、心が和んだ。家族みんなでいっしょに参加できるという形もとても楽しかった。

○ 同じく5月14日(金)のひめDON！を見た。愛媛県立とべ動物園、今治市ののまうまハイランドなどから、飼育員ならではの動物に関するクイズがテンポよく出題され、あっという間に楽しく見終わった。今は動物園などへ出かけることが難しい日々が続いているが、番組を通して、今の動物園の状況や、動物たちのようすを身近に感じることができた。次に動物園に行ったときには、今回知った情報を生かして、これまでとは違った見方ができるのではないかとわくわくした。視聴者の回答状況も分かりやすく、カウントダウンのデザインも動物がアレンジされた図柄で、とてもかわい



らしく視覚的にも楽しかった。大人も子どもも楽しめ、とても心温まる番組だった。クイズの回答方式は、「ひめポン！」で毎週木曜日に実施している「クイズひめ天」と同じということもあり、親しみやすかった。

- 5月14日(金)のさぬきドキッ!「ともに、前へ ～コロナ禍の春 ひとり親支援～」を見た。これまでも厳しい状況にあった人々が新型コロナウイルスの感染拡大によりさらに追い込まれているという話はよく耳にするが、自分の県で生じている身近な出来事だとは想像できない人も多いと思う。ひとり親を切り口として、香川県の現状を切り取ったことを評価したい。数か月に及ぶ取材をもとに、複数のシングルマザーが登場する考えさせられる番組だった。NPOの有澤陽子さんを中心に番組を構成することで、ひと筋縄ではいかない支援の難しさもよく伝わってきた。また、女優の木村多江さんのナレーションはとても落ち着いており、厳しい状況に耐えるシングルマザーをほうふつさせ、適役だと感じた。ただ、行政による支援についての言及や、それに関する解説がほとんどないことが気になった。本来であれば行政が担うべき役割をシングルマザーとNPOの努力で切り抜けようとしているように見受けられ、ある意味危険なものにも見えた。ひとり親というテーマを取り上げる際には、自己責任論を助長させない細心の注意が必要だと思う。そのためにも、今回の番組では行政が果たすべき役割について少しでも触れたほうがよかったと思う。
- 5月14日(金)のあわとく「AWAラウンドテーブル」は、異なる背景を持つ人同士の交流の場を作り出すという地域に寄り添う試みだった。ただ、互いに安心して意見を出し合うことはなかなか容易ではなく、もっと時間が必要だろうと思った。初めて会った人たちの中で自分の悩みを述べ、具体的な解決策を出すということを、25分間にすべて詰め込もうとしていて、やや焦点がぼやけたように感じた。今回はそこまで欲張らずに、まずは熱意を持って互いに語らう場面を紹介する程度にとどめ、その中でより深い結びつきが育てば、その後の活動の様子を「あわとく」などで番組化していくほうが視聴者に訴えるものが大きかったのではないか。ただ、今回のように地域に寄り添い、ともに悩みを解決していこうという姿勢はぜひ持ち続けてほしい。
- 連続テレビ小説「おちょやん」の放送が終了したが、新型コロナウイルスの感染が広がる中、この1年は「エール」と「おちょやん」に毎朝元気をもたらっていた。
- 連続テレビ小説「おちょやん」は、初めて最後まで見続けることができた朝ドラだった。途中で視聴をやめそうになることもあったが、最後は「終わりよければすべてよし」と思える前向きな内容でよかった。  
新型コロナウイルスの感染状況に収束が見えず、東京オリンピック・パラリンピッ

クの開催をめぐり賛否が問われている中で、公正中立な報道を心がけてほしい。選手たちにはさまざまな思いがあると思うが、仮に何か発言をしたとしても、一部を切り取って選手の意図とは異なる内容で報道しないようにしてほしい。

- G o T oキャンペーン実施時には政策を批判するような報道をしていたのに、緊急事態宣言が出た後は、飲食店が経営の危機という報道をしたり、ワクチン接種がまだ始まらないという報道をしていたかと思えば、始まった後は副反応が不安という報道が増えたりと、マスコミ各社の報道姿勢に一貫性がないことが気になっている。何事も過度にあおらないような報道を心掛けてほしい。
- 「空港ピアノ」や「街角ピアノ」をよく見ている。その場に居合わせた利用客や通行客の人生ストーリーの一端を、ピアノを通してかいま見ることができ、弾き手のストーリーとピアノの音が重なって、とてもほっとする番組だと感じている。アーティストなどプロが番組の中心になってしまうと参加の敷居が大変高くなってしまいが、これまでに見た「空港ピアノ 仙台」や「街角ピアノ 広島」では、会社の同僚に聞いてもらいたいと演奏する人や、50代からジャズピアノを習い始めたという人など、とても身近な印象を受けた。公共空間にある楽器をレンズを通して見ると舞台になり、とたんに一般の人が主人公になる。この番組は全国放送だが、地域の人たちが参加し、地域を元気にするためのヒントや、地域の人をつなげるきっかけが生まれるなどという点は、地方局の役割としても大切なことだと感じた。
- 若者のテレビ離れを実感している。理由を尋ねると、テレビは内容が作為的で、情報が信用できないという。情報は動画投稿サイトやSNSから自分で選択して得ていると聞いた。このような若年層に対して、正しい情報を発信し、視聴選択してもらうようにしていくことも、これからのマスコミ業界全体の課題だと思う。

NHK松山拠点放送局  
番組審議会事務局

## 2021年4月NHK四国地方放送番組審議会

4月のNHK四国地方放送番組審議会は、19日(月)、NHK松山拠点放送局(ウェブ開催)において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴してもらった事前に視聴してもらった「ギュッと！四国」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、5月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	半井 真司	(四国旅客鉄道 代表取締役会長)
副委員長	柴田 智恵	(有限会社大豊陸送 代表取締役社長)
委員	小松 圭子	(有限会社はたやま夢楽 代表取締役社長)
	田井 ノエル	(小説家)
	床桜 英二	(徳島文理大学 総合政策学部 教授)
	土佐 礼子	(三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー)
	中矢 憲吉	(愛媛新聞社 論説委員室委員長)
	滑川 里香	(一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事)
	西本 佳代	(香川大学 大学教育基盤センター准教授)
	村上 健太郎	(特定非営利活動法人NPO砂浜美術館理事長)

### (主な発言)

<「ギュッと！四国」(総合 4月3日(土)放送)について>

- メインキャスターを務める松山放送局の小野文明アナウンサーのトーンは非常に落ち着きがあり聞きやすいが、朝の番組なのでもう少し元気とめりはりがほしかった。ゲストで俳優の宮本真希さんのリアクションは自然体でよかった。フォトライターの野田明宏さんを紹介した「ギュッと！気にナル」のコーナーは、自身の経験や活動がよくまとめられていてわかりやすかった。野田さんが写真展を企画しているという紹介があり、今後の活動の目標や目的が詳しく知りたいと思った。「四国うまいもん巡り」は、地図の表示や図解を用いての説明でとてもわかりやすく見ることができた。アス

パラガスのいろいろな食べ方も参考になった。ただ、コーナー冒頭の西条市のひょうたん池の桜のシーンはもう少し短くてもよかった。新型コロナウイルスの感染拡大で暗いニュースが多い中、さまざまな話題が混ざったこの番組では、内容によってめりはりを付けて話題を伝えてほしいと思う。

- 「ギュッと！気にナル」の野田さんの話題は、土曜日の朝の番組としてはやや重く感じられたが、たいへん興味深かった。この番組では短時間での紹介になってしまったが、せつかくなら、「四国らしんばん」などでしっかりと取り上げてほしいと思う。ただ、「ギュッと！気にナル」のコーナー以外の内容は、平日の夕方6時台の各県のニュース番組と何ら変わらないように感じた。「ギュッと！気にナル」の内容がたいへんよかっただけに、そのあとのゲストからのコメントの中身が薄かったことが気になった。今回のゲストはキャリアのある俳優だけに、番組がその能力を十分に引き出せていなかったのは残念だった。全体を通して、番組の軸がどこにあるのかわからなかった。番組の設計として軸を絞りにくい部分があると思うが、土曜の朝という特性を認識して、何か軸になるものを決めて制作に努めてほしい。
- 「ギュッと！気にナル」のコーナーは10分の放送時間ではもの足りなかった。野田さんの経験はあまりに衝撃的で、この人をもっと知りたいと思わせる内容だった。もっと時間をかけて取材をして、「四国らしんばん」で取り上げるなど、しっかりと伝えてほしいと思う。「ギュッと！気にナル」を受けてのスタジオのコメントがありきたりなもので残念だった。また、野田さんが撮影の時にマスクを外していたことは気になった。新型コロナウイルスの感染拡大が続いている中で、マスクの着用を徹底するか、テロップを入れるなどの配慮があってもよかったと思う。「四国うまいもん巡り」のキャスターについては、プロとして食レポ時のコメントをもっと工夫する必要があるのではないか。番組最後の決めポーズは、ゲスト1人だけではなく、アナウンサーやキャスターも含め出演者全員で締めたほうがよかったと思う。
- 番組がスタートして1年で小野アナウンサーの進行に安定感が増したと思う。冒頭のニュース項目は、もっと明るく元気な話題を取り上げてほしい。「ギュッと！気にナル」では、いきなり介護施設で写真を撮影する野田さんの場面になったため、冒頭で野田さんの紹介があったほうがよかったと思う。今回の内容は野田さんの母親との壮絶な介護の話もあり、一つの番組としてしっかりと視聴したかった。どのようないきさつで野田さんを取り上げるようになったのか知りたい。「四国うまいもん巡り」では、アスパラガスの知らない情報がたくさんあり勉強になった。近江由佳キャスターのアドリブの効いたリポートも好感が持てた。今回のゲストであれば、もっと華やかな企画のほうが話が弾んだのではないかと感じた。

- 四国の情報を楽しく見ることができて、地域密着のニュースバラエティーのような雰囲気番組だったと思う。冒頭の阿波踊りの研修のニュースはほほえましい内容だった。一方で、「ギュッと！気にナル」は朝の情報番組で取り上げるにはもったいない内容だったと思う。野田さんの介護に対する関わり方はとてもすてきだと感じた。介護現場のリアルを温かい切り口で写真に収めようという姿勢に好感が持てた。介護の現場は明るい話題ばかりでなく目を背けたくくなるような現実もある中、その部分からも目を背けず、バランスのよい内容だった。後半の「四国うまいもん巡り」は、和やかな雰囲気で朝の番組らしくフレッシュでよかったと思う。ただ、内容がアスパラガスの豆知識に集約していたため、もっと四国ならではの内容があればよかったと思う。また、今回の料理は、ユーザーがない家庭には作りにくいものだったため、一般的な調理方法のものをもう1品紹介してほしい。

#### (NHK側)

冒頭のニュースは、ニュース性をもとに編成していることから、どうしても明るい話題だけとはならない。今回の「ギュッと！気にナル」は、介護というセンシティブな話題と、介護の現場を専門に撮る野田さんの存在を広く知ってほしいという思いがあり、土曜の朝にライトなタッチの作りで多くの人に見てもらおうとコーナー企画として取り上げることにした。改めて個別の番組として制作することも考えてみたい。「四国うまいもん巡り」については、四国の多様な食を取り上げたいという思いで今年度から立ち上げたコーナーだ。アスパラガスの豆知識の紹介で終わってしまったことと、食レポについての指摘は今後の課題としたい。多様なジャンルのテーマを取り上げる番組であるため、見せ方を工夫しながら視聴者に納得してもらえよう工夫していきたい。

- 小野アナウンサーの明るく元気で誠実なキャラクターが番組をさわやかにし、さまざまなゲストが番組に彩りを与えてくれていると思う。冒頭のニュースや「ギュッと！気にナル」の話題は視聴者の関心がある内容で、将来に希望が持てるいい話題だと思う。野田さんの明るい雰囲気のおかげで、介護という重たい話題ながらも視聴者が心を閉ざすことなくみることができたのではないかな。また、介護の世界の大変さも十分に伝わった。番組後半のアスパラガスの話題では、スタジオでゲストの宮本さんがアスパラガスのジュースをおいしそうに飲んでいる場面が印象的だった。ニュースやイベント情報など、さまざまな内容があり番組として一つにまとめることは難しいと思うが、あっという間の30分だった。最後の宮本さんのメッセージは、新型コロナウイルス

イルスの感染拡大下で大変な思いをしている若い世代の視聴者を勇気づけてくれたと思う。

- 新年度から新コーナーがスタートし、新鮮さが感じられた。週替わりのゲストで番組の雰囲気が変わる面もあり楽しみだ。四国は各県の個性が際立っているところが魅力であり、特に新型コロナウイルス感染拡大下で、自分たちの地域を見直そうという風潮が高まっているが、地域に密着したこの番組はそのきっかけになると思う。「四国うまいもん巡り」については、ふだん食卓に並ぶような食材をテーマにしているところがよかった。初めて知る情報も多く、このような紹介のしかたはよいと思う。「ギュッと！気にナル」は、フォトライターの野田さんを通じて介護のリアルが描かれていて考えさせられる内容だった。内容としては長時間の番組として放送してもよいと思うが、この番組のように情報番組を見る層に軽やかに伝えられた点は大変よかったと思う。冒頭の四国のニュースは四国らしい内容でよかった。30分の時間でバランスよく構成された番組だったと思う。
- フォトライターの野田さんに密着した取材は、短時間での紹介だったため、介護の現場を紹介したいのか、野田さんを紹介したいのか分かりにくかった。もう少し、野田さんの紹介があってもよかったと思う。ただ、介護に関心がある人の視聴時間としてふさわしい時間帯だったのか疑問だ。もっと見てもらえる時間に放送すべきだったと思う。野田さんの活動に興味をわき、今回の取材のきっかけは何だったのか気になった。「四国うまいもん巡り」のアスパラガスの紹介では、表面に水をふりかけたアスパラガスを映して「みずみずしい」と表現するのはわざとらしく感じた。また、アスパラガスジュースの作り方について、コメントでは「材料は新鮮なアスパラガス」と紹介していたが、画面には「アスパラガス」とだけスーパーが出ており、市販のアスパラガスでも作ることができると視聴者が誤解するのではないかと思った。また、スタジオの場面では、アナウンサーは立ち、ゲストは着席と統一されていなかったため、少し違和感があった。
- 「ハッとホッとナビ」で週末のお出かけ情報を紹介し、その後に天気予報を続ける構成は、天気を確認して週末の予定を立てることができ、土曜日の視聴者を想定したよい流れだったと思う。一方で、番組全体のねらいがわかりにくいように感じた。冒頭のニュースでは、玉串訴訟の裁判記録について取り上げ、次に徳島市役所の新人職員の阿波踊り研修が取り上げられた。全体を通してみると、後者の内容のほうが土曜の朝にふさわしいと思う。その日のニュースから選ばず、その週のニュースから選んでもよいと思う。「ギュッと！気にナル」について、介護の現場の紹介で、排せつやおむつ替えの場面があった。本人や関係者の承諾を得たうえで放送しているのだろうか、

認知症の高齢者の意思決定をどう扱うべきなのか深く考えさせられた。介護はとても重要な問題ではあるが、土曜日の朝で放送するには重すぎる内容ではなかったか。この番組はもう少し気軽に楽しめる内容がよいのではと思う。

- 1年前に比べ、小野アナウンサーの進行に落ち着きを感じられ、安心感をもって視聴することができた。昨年度に比べ、番組構成としては非常にすっきりしてわかりやすくなったように感じる。「ギュッと！気にナル」の野田さんの内容は興味深いテーマであるため、ほかの番組などでもっとしっかり取り上げてほしいと思う。「四国うまいもん巡り」については、タイトルが非常にストレートでNHKらしさを感じた。内容も旬のアスパラガスで、非常に朝にふさわしいフレッシュな内容だったと思う。今後またくさんの四国のうまいものを紹介してほしい。「ハッとホッとナビ」については、新型コロナウイルスの影響で外出が困難な中ではあるが、週末のお出かけ情報は少し心が温まる情報ではないかと思う。新年度にあたり、番組のコーナーが刷新されたので、番組の中でどこが変わったのか紹介があってもよかったと思う。
- この番組を通して、四国を盛り上げていこうという意気込みを十分に感じられる番組だった。番組内のコーナーの時間配分も適当だったと思う。「ギュッと！気にナル」の内容は非常によく、野田さんの作品はリアルでそのことばには力を感じることができた。ただ、土曜の朝には重たい内容であったため、「四国らしんばん」などで深掘りするとより価値が引き立つのではないかと思う。また、このコーナーは、特定の人物を取り上げるだけでなく、視聴者が行ってみたい、体験してみたいと思うような情報コーナーにもしてもらいたいと思う。「四国うまいもん巡り」については、春芽のアスパラガスジュースが一般の家庭で簡単には作れないものなので、視聴者が簡単に口にするものを紹介してほしい。また、キャスターのコメントや所作にはやや冗長な印象を受けたが、それはそれで土曜日の朝らしくてよかったのではないかと思う。四国の週末を盛り上げる番組として、週末の予定が決まっていない人が行動を起こすきっかけとなるような番組を期待する。

(NHK側)

「ギュッと！気にナル」のコーナーでは、介護のリアルな場面を伝えるため、いろいろと議論を重ねたうえで、排せつやおむつ替えの場面を使用した。指摘も踏まえ、今後とも検討を続けていきたい。また、このコーナーが番組全体の中で浮いてしまわないように、内容や演出について考慮していきたい。アスパラガスのジュースは、鮮度が重要で、市販されているものでは材料には向かないということも補足すべきだった。新型コロナウイルスの感染拡大の中、外出

を勧めるようなイベント情報は慎重に紹介しているが、状況が落ち着いたらより盛り込んでいきたい。

#### <放送番組一般について>

- 3月22日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「庵野秀明スペシャル」を見た。庵野監督はユニークな人だと知っていたが、会社のスタッフやNHKの取材者が振り回されている様子が印象的で、楽しく視聴した。SNSでの反響も大きいと感じた。  
また、4月17日(土)に放送されたNHKスペシャル「看護師たちの限界線～密着新型コロナ集中治療室～」を見た。他の番組では、「医療者に感謝を」などと呼びかけ、表面的な印象を受ける場面があるが、そのようなものより、今回の番組のほうが医療現場の実際の大変さを的確に伝えるには効果的だと思う。「自分の理想とする看護ができない」「患者さんに触れられない」という、現場の窮状はとても心に響いた。とても有意義な番組だったと思う。
- 3月26日(金)のとさ金「集え！防災志士」を見た。今回のように幅広い世代が防災意識を高めるための番組づくりに挑戦することは大切だと思う。番組全体はEテレのような雰囲気、視聴する子どもたちが番組に入り込みやすい作りになっていた。災害時の状況を想定して、自分だったらどうするかを「YES」「NO」で答える「防災サバイバル」の場面では、塾生から両方の意見がでてよかった。正解を誘導するのではなく、考えるきっかけを作ることができたと思う。この番組を親子が一緒に見る機会をぜひつくってほしい。番組をきっかけに家庭内で話し合い、防災に対する関心を高められれば、番組制作の目的に近づけると思う。新型コロナウイルス感染防止対策について悩みながら制作していると思うが、子どもたちの間に設置していたパーテーションはどこまで必要性があるのか疑問に感じた。「とさ金」では、これまでも「防災さんぽ」など楽しみながら防災を考える企画を放送しており、今後もさまざまな切り口での番組制作を期待している。
- どのチャンネルでも新型コロナウイルス関連の番組が多く、大切な情報だということとは分かっているものの、気が滅入り、テレビから離れている視聴者もいると思う。同じ新型コロナウイルス関連の番組だとしても、他の国で感染者や死者が大幅に減ってきたなど、前向きな情報があるとほっとし、もう少し頑張ろうと思うことができると感じている。  
4月5日(月)の鶴瓶の家族に乾杯「特別編 木村多江と徳島スペシャル」は、糸井重里さんが上勝町を訪ねた回が紹介されていた。2005年当時も視聴したが、久しぶり



に見ても楽しく視聴することができた。SNSでは、今回の放送を個人的に紹介している人もいて、楽しみにしている人が多くいた。テレビを見て、楽しいと思える時間を久しぶりに過ごすことができた。引き続き総集編の放送に期待している。

また、ウェブサイトで聖火リレーのライブストリーミングや、インタビューページをよく見ている。これまで地元でもどんな人が走るのかあまりよく分かっていなかったが、ランナーのプロフィールやインタビュー映像もあり、とても貴重な情報源となっている。

- 4月9日(金)のさぬきドキっ！「すごい人たち。3」を見た。2019年2月に放送された第1弾に次ぐおもしろさだった。その一番の要因は、水族館が好きすぎる後藤匠人さんのキャラクターにあると思う。この番組の魅力は、好きなことをして生きることや、個性的であることに、ある種の生きづらさがつきまとう現代社会に対して、バラエティ番組の立場からちょっとした疑問を投げかけ、単なる「すごい人」の紹介に終わらないことだと感じている。ぜひ今後もこの姿勢で続けてほしい。また、MCを務めた四星球の2人は、今回も個性的な登場人物と視聴者とをつなぐ役割を果たしていた。過去の放送では、はっぴとブリーフ姿で出演というNHKらしくない演出がどうなっていくのか温かく見守っていたため、今回のジャケットとパンツという衣装には一抹のさみしさを覚えたが、個性的な人物の紹介に集中することができ、結果的にはよかった。ただ、衣装の色が地味で、かつ見慣れた「ゆう6かがわ」のスタジオで収録していたため、少しおもしろみに欠けた。くどくなりすぎない程度に、何かしらの工夫をしてほしい。
- おなじく4月9日(金)のさぬきドキっ！を見た。前回の放送時、進行の四星球が、ステージ衣装のはっぴとブリーフ姿で不快感を覚えたと言見を述べたが、今回はカジュアルなふだん着姿で、安心して番組をみることができた。また、2人だけの進行だったが、トークが軽妙でよかった。水族館のイルカショーの音響を担当する12歳の後藤匠人くんは、5歳からイルカショーに関わり、今では大人の新人を教育する立場となり、ライブの演出家に「彼がいないと成り立たない」と言わしめる存在だ。新型コロナウイルスによる休館中に自宅でライブを再現する様子や編曲作業に取り組む姿、母親や水族館スタッフの証言を織り混ぜることで、彼の水族館への情熱や「すごさ」が伝わってきた。15万円の金魚を育てる中島一誠さんの紹介も丁寧な取材と編集により「すごさ」を表現できていたと思う。第4弾を期待したくなる内容だった。

(NHK側)

単なる達人の紹介にとどまらず、その背景なども視聴者に届けたいという思いが伝わりよかった。番組への意見を踏まえ、四星球の

衣装を変更した。2人の人柄のよさも引き出せたと思う。頂いた意見は、現場にしっかり伝え、第4弾の制作も目指していきたい。

- 4月15日(木)のクローズアップ現代+「松山英樹・独自映像がとらえた知られざる舞台裏」を見た。愛媛県出身の松山選手を昔から応援しており、2017年の全米プロゴルフ選手権で勝利を逃して号泣する松山選手の姿が忘れられなかっただけに、今回のマスターズ優勝は言葉には言い表せないほど感動した。その感激が冷めやらぬうちに番組で取り上げるというスピード感に大いに拍手を送りたい。まさに日本中の人々がクローズアップしてほしい内容であったと思う。限られた時間での制作だったと思うが、松山選手が優勝した時点で放送する予定はされていたのだろうか。このように時宜を得た番組を今後とも期待したい。

また、松山選手の話は、4月12日(月)の「ひめポン！」でもすぐに取り上げられていて、愛媛県民全体で感動が共有できたような感じを受け、とてもうれしかった。

- 同じく4月15日(木)のクローズアップ現代+を見た。18歳の若々しい松山選手をとらえた映像や、「才能は有限 努力は無限」という壁にかけられた色紙の文字を地で行く松山選手のトレーニングの様子は今では貴重なものだった。10年間にわたる取材映像から、偉大な勝利の陰には涙があり、努力があるということが十分に伝わる内容だった。全米オープン2位の実績を持つ青木功さんのインタビューも秀逸だった。今後、松山選手本人にこの映像を振り返ってもらいながら話を聞く番組を見てみたい。全体を通してとてもよい番組だった。

- 同じく4月15日のクローズアップ現代+を見た。日本人初のメジャーを制した松山選手の密着取材を、すぐに放送しており、とてもうれしかった。大学時代の貴重な映像も盛り込まれていてよかった。以前のインタビューで、「メジャーで勝ちたい」と何度も話している姿が印象的だった。日本人がメジャーで勝てないと思われることに、悔しさがあっての今回の優勝だったと伝わってきた。ゴルフを知らない人でも、興味深く見ることができる内容だったと思う。また、新型コロナウイルスの感染拡大の中、大きな影響を受けている東京オリンピック・パラリンピックを前に勇気づけられるようなよい番組だった。ほかのアスリートにとっても、よい刺激になったと思う。

また、4月11日(日)のNHK松山放送局開局80年記念「タイムトリップQUIZ バトルE80」(総合 13:05~13:49 愛媛県域)を見たが、番組の直後にあった「悲しきデブ猫ちゃん」のテレビアニメ化を伝えるPRは、松山局の大美局長自身が出演していてとても印象に残った。

- 4月17日(土)の「ギュッと！四国」を見た。番組の全体の構成は、やはりもっと

テーマを絞りこんだ設計にするよう検討してほしいと感じた。「ギュッと！気にナル」のコーナーで高知県の朝倉夜間中学を取り上げたことはよかったと思う。公設民営で約30人の生徒が通っており、生徒の中にはかつて不登校だった小学生もいた。非常に興味深い内容で、4月3日(土)の同コーナーで取り上げた「介護のリアル」に相当するような企画だった。非常によいテーマであるだけに、県立の夜間中学校との関係性や、夜間中学校でありながら小学生も通っていることについてもう少し丁寧な説明がほしかった。とりわけ、番組内で四国の放送局が制作した番組の告知に相当時間を費やしていたことが気になった。このような時間があるなら、メインの企画についてもう少ししっかりと説明を加えてほしかった。非常によいテーマだけに残念な気がした。

(NHK側)

メインのコーナーと、他の番組告知のバランスについては、いただいた意見を参考に今後検討していきたい。

- 4月18日(日)に再放送されたダーウィンが来た「東京で復活中！絶滅危惧種コアジサシ」を見た。コアジサシはとてもかわいらしく、コアジサシを集めるために模型を作るプロジェクトや、天敵から守る様子に感動した。その後コアジサシが子育てのために羽田沖で魚を取る様子や雛の成長、その後、南半球へ飛び立つ姿には心を打たれた。多くの人に感動をもたらす内容だと感じた。
- 新年度からEテレの朝の編成は変わったが、とても効果的だと感じている。昨年度までは「にほんごであそぼ」が午前6時35分から編成されていたが、朝から子供たちが視聴するには、少し内容が難しいと思っていた。新年度からは、にぎやかな音楽の「オトッペ」となり、子供たちも楽しく視聴できると思う。午前7時から30分間は10分区切りで番組が変わるため、時計代わりにも活用している。
- 新型コロナウイルスの感染拡大が続き、暗い時代ではあるが、スポーツ界では水泳の池江璃花子選手が東京オリンピック代表に内定したり、松山市出身の松山選手が、アジア人として初めてマスターズで優勝したりと明るいニュースがあった。スポーツは、このような時代でも、あるいはこのような時代だからこそ、感動と勇気を与えてくれると思っている。大型連休中も、外出や移動の自粛を迫られているが、ぜひスポーツ中継などの番組を増やし、元気を与えてもらいたい。

NHK松山拠点放送局  
番組審議会事務局